



これは本当のアフリカのお話です

大好きで、いとおいしいあなたへ

評者・藤原 美幸 徳島文理大学

『これは本当のアフリカのお話です』は、9年ぶりに出版された徳永瑞子さんの活動記である。徳永さんだからこその「アフリカの本当の話」に満ちた本でもある。

徳永さんの著作は、まるでその光景を映画のスクリーンで眺めているかのような情景描写の美しさや、現地の人々と、お互いを1人ひとりのかけがえのない存在として認め、心を通じる真の出会いを長年重ねているからこそその人物描写が、いつも読者を感動させる。本書も従来同様に、いや、さらに経験を積み重ねたぶん、感動もバージョンアップされた“本当のアフリカ”を感じ、知る本でもある。

「本書ではエイズや貧困による悲惨さを書くのではなく、私がアフリカで出会った人々、多くの患者さんや職員、そして友だちとの交流や思い出を書き綴ってみた。死者の数字にくくられる人々のそれぞれの生きた証を書いた。読者の方々に、アフリカの人々の優しさ、明るさ、ユーモア、厳しさ、悲しさ、そして生き抜く力、さらには人間の根源とは何かなどを感じてもらえたらと思う」と「はじめに」で述べている。

とは言っても、「あとがき」にあるように「16年間の活動を振り返ってみても、食べることが重要な支援活動であったように思う。そして、これからの活動も食べることに對する援助が中心になるだろう」が現実である。悲しくて、悲惨な、貧

アフリカが身近になり 本当のアフリカを感じ、知る本



徳永瑞子 著

定価 1470 円(本体 1400 円+税 5%)

四六判／青海社／2009 年

困との闘いといった「本当のお話」もまた、満載だ。前作『シンガラミンギ(評者注：現地語で「ありがとう」)ーアフリカでエイズ患者と共に生きて』(サンパウロ社)では、エイズで亡くなった方のカルテを「天使の登録簿」として大切に保管しているエピソードに胸打たれた。

死んでいく大人も子どもも、その1つひとつの死はパーソナルな悲しみであり、悲惨でもある。単なる死亡統計数値で表されるだけのものではないはずだ。本書でもその登録簿に加わったマリちゃん、アラン、そしてシスター・クララらとの親密で豊かな交流と彼らの生きよう

が感動的な筆致で描かれ、涙が自然にあふれてくる。

しかし、終盤の章で描かれる3歳のエイズ児と祖母、HIVと結核に感染し一時は死の淵にいたが快方に向かった14歳のマリウムと赤いハイヒール、7歳でガンジャ(いわゆる割礼)を終え自信に満ちあふれたかに見えるエイズ孤児で母子感染児であるムサのエピソードに、希望の光を見る。

アフリカは遠い。まだ行ったことがない。

徳永さんの著作を読むたびに、アフリカがぐっと身近になる。サハラ上空から満点の星を眺め、これは「マリちゃんの星」「アランの星」とつよく自分の姿を想像する。そんなアフリカを身近な知っている地域として感じられる本書を、皆様に紹介できることに感謝している。